

安陽出土と傳へる二三の玉援の戈に就いて

梅 原 末 治

一

古の安陽、今の河南省彰德府外の殷墟が、龜版獸骨文の出現で一部金石學者の關心に上つた頃、早くこれの伴出遺物に注意を向けて、其の類の蒐集をも行ふた羅振玉氏の當初の所獲品中に一個の青石を嵌入した銅製器片があつた。その片は氏の『殷虛古器物圖錄』中に收められて、手法其他から、同時蒐集の遺品の間に特異な存在であつた事、故濱田博士の『國華』竝に『東洋文庫英文紀要』⁽¹⁾に載せられた關係の文其他から知られるのである。併し羅氏は同器片に對し彝器殘耳なる名稱を附して所謂尊彝の破片たるを想定してゐるが、同時に其の解説の末に何物たるやを知らずと書いて居り、引用者また器自體に就いて深く顧みるところがなかつた。處が昭和二年秋瑞典のストックホルムで此の器片を實査する機會を持った筆者は、其の示す形態の觀察から、彝器の殘耳とするに疑問を懷いたことであり、更に其の後ボストン博物館で見た類品から推して、これを以て銅戈の一部即ち其の「内」の

安陽出土と傳へる二三の玉援の戈に就いて

複雑裝飾化したものとする見解に到達したのであつた。其の詳細は雜誌『史學』の「傳殷墟發見の銅製品に就いて」⁽³⁾なる文中に盡してゐる。

殷墟は右の文を發表した少し前から學術的發掘が行はれ出して、同地に對する世人の注意を高めると共に、種々な新發見を齎したことこゝに改めて説くまでもない。そしてうちに嚮の鄙見を裏書きする裝飾化した「内」の銅戈等も多數に含まれてゐたのであつたが、更に昭和九年以降、新たに同時代と認められる夥しい古墳の發掘を見るに及んで、著しく關係の資料を加へて曩日の推測に對し、更に其の性質觀に一步を進め得るものがあることを思はしめるに至つたのは欣幸とする處である。尤も此の古墳群の出現亦他の例に漏れず、盜掘者の檢出に係り、彼等に依つて無慮數百の遺跡が攪亂され盡して後に、やうやく學者の調査を見るに至つたと云ふ有様であるから、出土品が所謂殷墟物として洋の東西に四散し、爲に確實なる資料としては極めて價値の乏しいものとなつてゐるのを遺憾に思ふ。中で上記の青石を嵌した戈の類は、價格の關係乃至趣好の上からでもあらうが、大半紐育のウインスロット

「翁の有に歸したと云ひ得る。いま翁の好意に依つて手にするを得た寫眞に依るに、是等のうちに援が玉より成つて、それを右の嵌石の「内」に嵌込んであるものが少くない。此の類の攻玉の精と、鑄銅嵌石の巧とには人目を驚かすに足るものがあり、鑿の破片を遙に凌駕してゐる。而も「内」の示す技巧の一致から、彼よりして是等の諸器をまた所傳の殷墓出土品となし得るのは、當代の文物の發達を推す上に重要な點としよう。よつて次に筆者の親しく實物を觀た二三例に就いて其の所見を録することにした。其の記述をば翁の所藏に係る遺品のすべてに互ることを避けたのは、此の種の器には出土後修補、變形などが加へられ勝なので、事實の確かさを所期した爲に外ならないのである。

- 〔註〕(1) 濱田博士「支那古銅器研究の新資料」(『國華』第三七九號及『東亞考古學研究』所收)及び Engraved Ivory and Pottery, found in the Site of the Yin Capital (Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko, No. 1, 1926)
- (2) 羅氏の説明には「古彝器斷耳、以銅爲之、花紋至工而嵌以寶石、綠如翠石、不知爲何物」とあり。
- (3) 『史學』第八卷第四號所載。なほその文は補訂の上『支那考古學論攷』に收めて置いた。
- (4) 滕固氏『征途訪古述記』及梅原「河南安陽發見の遺物」(『東方學報』京都第七冊)等参照

二

さて右の遺品中先づ挙げたいのは昭和十一年の春北京で實見した一

例である。これは總長八寸許りの古式戈の系統で、圖版第六の左に示す様に、一部分白玉化した極めて光澤の高い玉援をば、一方に偏在した「内」につゞく胡の一部に嵌め込んで形を整へたものである。そしてその銅製の部分はいま鮮かな綠鏽を以て覆はれた上に、其の間また水銀の朱色をとめて古墓からの新出土品たるを明示し、古色のまことに掬す可きものがある。本器では其の「内」は簡単な輪廓をしてゐるが、此の部分と胡とは兩面とも正向の饗餐文が突線で鑄出されてあつて、線間に青石を嵌入したこと既引羅氏舊藏の例と同じく、本例ではそれが鏽で被はれながら殆んど本來の儘に遺存し、玉援の嵌入した部分の状態また原形をとめて、修補の痕を見受けない點がまことに珍らしい。されば此の玉援の戈は殷墓出土の同種の遺品の白眉と云ひ得るもの、其の表はされた饗餐文の示すところ當代の銅器文の整齊なと一致することも亦指摘されるべきである。

實例の二は昨年十月、事變中の北京から白江信三氏の齎し歸つた同種の遺品である(圖版第五)⁽²⁾。これは嵌め込まれた玉援が前者よりは稍と短く、また「内」の輪廓の夔龍形をなす所に前者との違ひがあつて、後者は羅氏の例に近い。⁽³⁾其の援の短いことは、一見した所では、本來長かつたものが折斷されて出土し、後にかく削つて形を整へたとする推測を加へ易いが、仔細に檢するに、面の肌其他の示す所右の形が少くも埋葬當時の儘と見るに疑を容れる餘地がない。なほ右の玉援を嵌入した部分のよく原形をとめてゐるのもまた珍重せらるべく、兩者の同時性が充分に認められる次第である。此の玉援は所謂白玉の類で、面に

高い光澤があり、その一部の銅鏽に染むところ、磨研の高い點など、共に一層器を引き立たせてゐる。

銅製の部分特に其の「内」端と胡との表裏に於ける裝飾は、同じく

突線を以て鑄表はされ、その間

に青石を嵌した點では前者と違

つてゐない。併し胡の文様が正

向した饗餐の顔面であるのに對

し、既に觸れた様に、その「内」

は輪廓に應じて、表はす處のも

のが一部分透しとなつた饗龍形

より成る點に相違がある。第一

圖の1に示したのは實物に就い

て確め得た其の詳細圖である。

これに依つて其の尊彝文との相

似が明にせられるであらう。圖

文の突線間に嵌めた青石は本例

では原形の儘なのは一部分に限

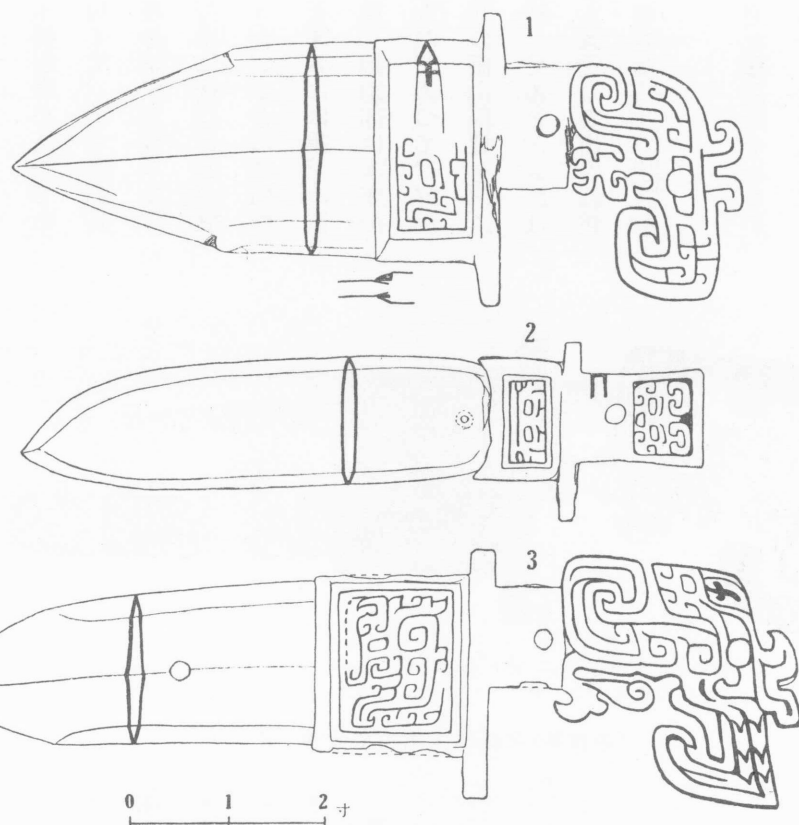
られて、大半は一度脱離したの

を出土後修補して舊形に復した

ものに屬する。従つて同部は前

者の如き鮮かな古色に乏しい憾がある。併し詳細に觀て行くと、隨所

に原形の面影が見出されて、それと修補の明な部分との間には差異が



第一圖 傳安陽出土玉援銅戈三例實測圖

あり、この種技巧の新古の鑑別に資する所が多く、なほ此の種の嵌石がもと線間を埋めた白垩狀の膠材上に、薄い青石を貼つたものであることの確められた點をも記す可きである。

第三例は第二の古式戈と同時に將

來された總長七寸の器である。示す

形(圖版第(六の右))は、第一の器に近いが、

それに較べると通じて細長い感じを

與へる。玉援は蠟石様の色澤をした

もので、前二者の様な鮮かな色彩美

を缺き、磨研の度またさして高くな

く、鑄銅の部分の色澤も同様で、一

見出土後可なり手の加へられてゐる

ことを思はしめる。「内」は直方形の

簡單なもので、同部竝に胡の一部に

また饗餐文を表はし、青石を嵌する

が、現在の青石は大半後の修補を經

てゐる。其の圖文は「内」の方は整

然たる獸面であるが、他は稍々便化

されてゐること第一圖2の實測圖に

示す如くである。なほ此の器では其

の玉援の下邊に小孔が一方から穿たれて居り、またこれを銅製の部分

に嵌め込んだ具合にも若干の議す可き點があるので、兩者のそれ／＼

が古いことに誤りはないが、現形を以て本来の儘とするに就いては問題がのこる。

第四は前諸例に先立つ昭和九年六月に白江氏の支那から齎し歸つて筆者の觀るを得たもので、形は第二の遺品に似て、同じく鑄銅の一部に玉援を嵌め込んでゐる。尤も此の器では、其の玉援は短くて、示す形が長い玉戈の一部分を切斷した様な外觀を呈するのみならず、それを鑄銅の部分に嵌め込んだ所に後の作爲の痕が稍々著しいので、玉援そのものゝ古いことには問題はないが、現狀を以て器本来の形とするには第三の器以上に疑が挿まれる次第である。併し鑄銅部は本来かかる玉援を嵌裝する爲に作られたものであつて、鮮かな土中古の色澤を存し、銹化した其の面に龜裂を伴ふところ安陽出土品に通有な特徴を持つてゐる。されば其の所傳を信ず可く、更に器を飾る圖文の表出の鮮鋭なる稀に觀るものとする(第二圖)。即ち次に其の狀態を擧げよう。

先づ「内」の裝飾文は第二の器と似た夔龍形であるが、彼に較べて表出が鋭く、その嘴の部分とも云ふ可きうちに添へ表はされた虺の俯瞰形とも見るべきものに著しい特徴が認められる(第一圖)。次に援の本の部分は前

諸例がそれに對して正向の饗餐文であるのと違つて、柄の着裝に應じ

て下より見る可く饗餐の半面形を寫したものであり、而もそれが古銅器文に見ると同様な最も整ふた形態を具象したことが注意されるのである。(4) 兩者の圖文間またもと青石を嵌貼してゐたのであるが、現在では大半脱離して、其の若干殘存するものも(第二圖、四五を除いては後の修補の様である。元來此の種嵌石の技巧は、其の實際からして原形を遺存する事が可なり六ヶ敷い様に見える。されば其のほぼ全い第一例はいよゝゝ以て珍重せらる可きである。

第二圖 傳安陽出土玉援銅戈(第四例)

〔註〕(1) 此の寫眞は在紐育の田中吉次郎氏を通じてウインスロップ翁から贈られたものである。註記して同翁に感謝する。

(2) 此の寫眞は次の遺品のそれと共に東方文化研究所の羽館易君の撮影した原版に依つた。本誌に掲載するに當り右の撮影竝に調査の自由を與へられた將來者たる白江氏の好意と共に負ふ所を記して置く。

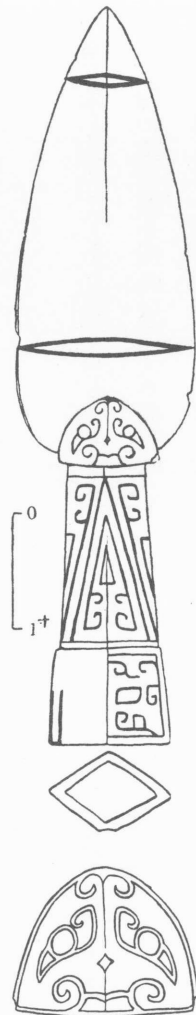
(3) 此の點からすると羅氏舊藏の「内」の屬した器はもと復原の際考へた様なすべて銅製であつたと見るよりも、此の種の玉援品であつたかとも思はれる。其の後の例に於いて銅製品に嵌玉のものが比較的小さいことが此の場合併せ考へられる。

(4) 尤も此の形に於いても、夔の脚部は他と可なり違つてゐるので、それは出土後の修補であらう(第一圖の3参照)。

三

前項に挙げた諸例は云ふまでもなく支那古代利器中特色の著しい戈の形をしたものであり、なほ狹義の勾兵の戈に較べて胡が下方に長く延びてゐない點で、所謂古式戈の外形をとつた類とする。さり乍ら是等は孰れも其の「内」に裝飾が加へられてゐるのみならず、第二・第四の兩者の如き著しく繁褥化して實用の器たるに過ぎたことが同時に注意せられるのである。

第三圖 傳安陽出土玉身矛(鉞)實測圖



を物語るものであるから、引いて實用の利器と離れた寶器的なものと見て當代貴紳の愛重品とする解釋が加へられるであらう。一體古代支那人の愛重した玉器のうちには、その基くところも實用の石の利器にあつたと想定されるものが少くない。例へば圭の有孔石斧に於けるや、璧の環狀石斧に於けるが如きそれであつて、是等の上に支那古文の基く所の同國石器時代にあることが説かれてゐる。(2)こゝに新たに見出された遺品また右と連關して、玉器愛重の背景の下に生じた青銅利器の寶器化の例とするにふさはしいものとしよう。

如上の遺品が見出されたと云ふ安陽の遺跡からは同じ形の銅戈や銅矛(鉞)等が多數に見出されて居て、うちに實用に供したと認むべき類を存し、是等の上に當代行はれた利器の性質を

の知られる本諸例では、「内」がか様な性質を示すに加へて、更に通じて其の援が玉質を以て作られ、前者に嵌裝、以て完形をなして特色を著しくしてゐる。して見れば是等の器はいよゝゝ以て實用の利器と同一視し難く、同じ外形ではあり乍ら、それと違つた意味を持つてゐるであらうことが考へられて来る。いま實物に即してこれを推測するに、其の嵌込まれた玉援は概して佳良な硬玉と認められるし、また裝飾も圖文が特色のある動物文である上に青石を貼嵌して、技巧極めて見る可きものがある。兩者は是等が通有の品でなく、自ら珍貴な遺品たる

安陽出土と傳へる二三の玉援の戈に就いて

徴し得ること廣く世に知られてゐる。(3)併し他方同時に同じ外形乍ら極めて薄く作られて、副葬品としてのみ役立つ所の所謂明器類がまた少なからず存在し、それ等は銅質も違つてゐる。(4)そこで筆者は嘗て前者の實用の利器も既に一程度の發達した形態を示す所から、同じ時代にかゝる明器の製作をも見たものとして、當代文化の性質を推す上に一つの手懸りとなるだらうことを考へたのであつた。處が新たに紹介した遺品から今や更に同じ遺跡に形は同一で而も反對に製作が巧緻極めてまさに寶器と見るべき類の存在が數へられるとすれば、安陽の遺

跡の示現する文化段階なるものは、單に利器形のみからするも複雑な相を具象して、當初一部本邦學者が想像した様な低いものでなかつたとせなければならなくなる。本文では専ら玉援の銅戈のみに就いて記したが、同遺跡發見の銚にあつても玉鋒を嵌め込んだものが、また同様に見出されてゐる。ウインスロップ翁は最近其の收藏に歸した二例の寫眞を筆者に贈られた。同種の遺品では此の外に早く大正の末年に安陽から出土して、現在倫敦のレーフェル氏 (Oscar Raphael) の珍藏する一器がある。⁽⁵⁾ 往年實査した調査に據るに、其の鑄銅の袋穗の圖文乃至嵌石の具合等、すべて上記の諸品と同巧である。いま併せ載せて参照に供へる (第三圖)。

人或は是等の遺品の巧緻に過ぎると云ふことから殷代のものとするに疑を挿むかも知れない。勿論安陽の遺物群を同代と斷ずる絶對的な微證はなほ見出されてはゐないが、併し早く殷墟の出土品と傳へられる類竝に近年多數に採掘せられた古墓からの出土品の示すところ、國立中央研究院の學術發掘の結果と相俟つて、其等が略ぼ實年代の明な河南金村乃至安徽壽縣等古墳の内容との間に著しい隔りのある點から、所傳の據所あるを想定せしめること筆者の既に指摘した如くである。⁽⁶⁾

而して本文で取扱ふた玉援の戈の實際また、裝飾文に於いて同じ特徴を具へてゐること殷墓出土の尊彝其他との比較から容易に推される次第である。かくて是等の遺品は現存支那の古い工藝作品として、其の實際が一層の興味を呼ぶのであり、なほそれが攻玉の技術と結びついた點で、尊彝の類とは別個な妙味を有することが感ぜられる。而して

此の玉との連繫こそ從來明瞭を缺く古代玉の考古學上の考察に新しい示唆を與へるものとして、または等の遺品への關心を高めるのである。

〔註〕(1) 梅原「傳殷墟發見の銅製品に就いて」(前出) 參照。

(2) 濱田博士「有竹齋古玉譜」解説等參照。

(3) 梅原「支那の青銅器時代に就いて」(『支那考古學論攷』所收) 參照。なほ近年の所謂殷墓の發掘に於いて、その一つの墓から數十のかゝる利器が發見されたことペリオ教授の記述に見えてゐる。Prof. Paul Pelliot: The Royal Tombs at Anyang ("Studies in Chinese Art and some Indian Influences", London, 1938)

(4) 此の點に就いては既に(3)の文中に觸れたが、その詳細を近く公にする「支那古銅利器の化學成分に對する考古學的考察」に於いて盡すであらう。

(5) Prof. Paul Pelliot: Jades archaïques de Chine, appartenant à M. C. T. Loou, (Paris, 1925)。而して同器を安陽の出土とするは黃伯川氏の『鄧中片羽』に據る。

(6) 梅原「河南安陽と金村の古墓」(『史學雜誌』第四十七編第九號及『支那考古學論攷』所收) 參照。(昭和一四・二・一四稿)

〔附記〕

右の一文を書いて後、最近に安陽古墓出土と傳へる玉鋒の矛二口の紐育に齎されたことを知つた。寫眞に依ると形態は本文に附載したレーフェル氏所藏の一例に極めて近いもので其の銅製の袋穗には同じく動物文が突線で鑄表はされ、その間も青石を貼嵌してある。其の青石は二者共に大半修補したものらしく見えるが、器自體は新しく世に出た印象を與へて本來の形を傳へたことが推される。これ等の器は、上に觸れた利器の寶物化したのが戈のみでなく、矛に於いても同様であつた好例を加へるものとして、鄙見の新しい證據に不取敢附記して置く。(昭和十四年四月校正の日)

(一) 傳安陽古墓出土玉援戈

米國
ウインスロップ氏藏

(二) 傳安陽古墓出土玉援戈

米國
ウインスロップ氏藏